知的障害特別支援学校における
ICTを効果的に活用した授業づくりの組織的な推進

学籍番号　229103
氏　　名　小川　香織
主指導教員　陸奥田　維彦
副指導教員　寺嶋　浩介

１．問題の所在と研修の目的

事例校は、知的障害がある児童生徒を対象とした特別支援学校である。全国的に知的障害特別支援学校についてはデジタル教科書の整備すら進んでおらず、児童生徒の実態に応じたICTの活用事例や教材の整備・共有が進んでいるとは言い難い現状がある。事例校においても、児童生徒の1人１台端末が整備され、ICT活用環境の整備が急速に進んだが、その活用については個々の教員に任されており、時間や人的資源が限られる中で、学校として組織的なICT活用を、どのように進めていくのかが課題である。そこで、本実践研究の目的は、知的障害特別支援学校においてICTを効果的に活用した授業づくりを組織的に進めることができるのか、またそのために必要な要因は何かを明らかにすることである。

2．研究の内容と方法

特別支援教育におけるICT活用の目的を、障害の有無や学校種を超えた共通の視点として、目的A「ICTの特性、強みを児童生徒が自ら理解し使いこなせるようにすること」、目的B「教材・教具や学習材・学習用具としてICTを活用することにより、教科等固有の目標をよりよく達成すること」に加え、特別支援教育に特化した視点として、目的C「適切な教材の活用や彼らの認知特性に合った支援機器等を活用することで、学びにくさを補い、本人の力を高めるためにICTを活用すること」に設定した。教員には適切な教材や、アプリケーション等を用いて指導を行うことができるような知識・技能を身に付けることによって、一人ひとりの障害の状態や特性を理解した上で適切なICT活用を行っていくことが求められている。

そこで、事例校の教員が主体的に学ぶ場として、情報で学ぶ「ナレッジマネジメントシステム」、経験して学ぶ「パフォーマンスサポートシステム」、仲間から学ぶ「コミュニティ」、業務直結型の「研修」を設定することとした。教員がICTを効果的に活用した授業づくりに主体的に取り組む状態を、「教員一人ひとりがICTを活用する目的を判断しながら、ICTを必要な場面、方法で活用する授業づくりを自ら行い、実践している状態」と位置づけ、この「4つの学びの場」によってこのような状態になる組織的環境を形成することができるのかを実践し検証した。事例校の教員に対して事前調査として質問紙調査を行い、事後調査においても同様の質問紙調査を実施することで変容をみることとした。また、半構造化インタビュー行って質的分析を行い実践の結果と合わせて検討することで、実践の成果と課題を考察した。

3. 実践の結果

「4つの学びの場」を組み合わせることで教員がICTを効果的に活用した授業づくりに主体的に取り組む組織的環境を形成した。

① 仲間から学ぶ「コミュニティ」

実践事例やICT活用についての情報を共有する場を、仲間から学ぶ実践コミュニティとして、ウェブ上の掲示板機能を使って設定した。新たな教材を知り、実際の授業に活用し、それをまた掲示板で共有するという循環もみられ、ICTを活用するきっかけとなったり、モチベーションを高めたりすることにつながっていた。

② 情報で学ぶ「ナレッジマネジメントシステム」

ウェブ上の教員向けマニュアル集やリンク集の充実を図った。①のウェブ上の掲示板で共有された実践事例や便利なサイト、教材等の情報を一覧化することで、必要な情報にすぐアクセスできるポータルサイト「ICT 活用のための教材・マニュアル・リンク集」を作成し、教員向けウェブから閲覧できるようにした。「探したくなった時にいつでも見れるから助かる」等、時間を効率的に使え、ICT を活用する際の安心感につながっていた。

③ 研修で学ぶ

全員での対面研修でしかできない具体的な経験を積み重ねることを重視した研修内容とし、研修以外の学ぶ場と組み合わせることで、研修時間をなるべく短く設定することとした。事例校で毎月開催される職員会議直後の時間を使い、毎月1回のペースで10分程度の「プチ情報研修」を2023年5月から開始した。8月は学校が夏休みの期間を利用し、1時間の「情報研修」を行った。8月の研修で行ったワークでは、具体的な場面や目的を考えて授業案を作成した。11月の「プチ情報研修」では、自分自身のICT活用について振り返るワークを実施した。それぞれの教員が様々な授業の場面でICTを活用したことについて、その位置づけを考えながら振り返っていた。研修を負担が少ない短い時間設定で繰り返し実施する形式としたことは、教員が効果的にICTを授業で活用しようとするきっかけを増やすことや、意識を持ち続けることにつながった。

④ 経験して学ぶ「パフォーマンスサポートシステム」

教員のニーズに基づき、ICT を活用する授業において困ったときや、初めての方法で取り組む時に個別支援を行った。現場での経験の中で、周りの教員の ICT 活用から学んだり教えてもらったりという教員同士の学び合いもみられた。教員同士の学び合いが、他の「学びの場」がきっかけとなって発生しているケースも確認できた。

4. 結果からの考察

これらの「4 つの学びの場」が組み合わさることで一過性の学びで終わるのではなく、継続して学び続けることを促進し、教員の意識の変化や行動変容につながったと考える。インタビュー調査や質問紙調査からも事例校の教員が児童生徒の主体性を大切にし、「興味喚起」や「モチベーション喚起」を意識した ICT を活用した授業を行っていることがうかがわれた。そして、発達段階や教科、目的、人数に応じた児童生徒の主体性を大切にした活用を的確に行うことが、「理解促進」や「個別最適な学び」につながり、効果的な ICT 活用の促進につながることが分かった。